

現代日本語の文学作品における無生物主語の他動詞文

——主語の語彙の意味から——

ゆう
熊

おう
鶯

〔キーワード：名詞句階層、名詞の語彙の意味、無生物主語〕

1. はじめに

日本語の他動詞文¹⁾では、無生物名詞²⁾が主語³⁾として使用されることは原則としてないと言われている(外山滋比古 1973、金田一春彦 1981、石綿敏雄・高田誠 1990)。

(1) あの事件は加藤を驚かした。(角田太作 1982: 206)

(2) 爆発が彼を起こした。

(1) (2) のような表現は、不自然、または翻訳調であると、指摘されている。だが、現代の日本語の文を縦覧すれば、無生物主語の他動詞文の使用が稀ではないことがわかる。その中には (1) (2) のような例も含まれている。以下は、現代の日本語の小説から引いた例である。(当該文の主語(ガ格)、目的語(ヲ格)、述語に下線を付して表示する)

(3) 晴れた真夏の日射しが、薄汚れた街を、いためつけるように照りつけていた。

(『異人たちの夏』 p. 76)

(4) 東京にいる時のように女性にモテない。このことが、先生を憂鬱にした。

(『彼岸先生』 p. 90)

(5) 風が私の髪を道路沿いの柳の枝のように吹きあげる。(『家族シネマ』 p. 74)

(6) 座り主が動いたせいで、彼の椅子の脚はブリッツを砕いたような軽い音を出した。

(『蹴りたい背中』 p. 8)

以上の例から、無生物主語の他動詞文は、実際には、現代日本語において一定の役割を果たしていることがうかがえる。これまでの無生物主語の他動詞文に関する研究の多くは、主に英語との比較(国広哲弥 1967、金田一春彦 1981、石綿敏雄・高田誠 1990)という視点からなされていた。無生物主語他動詞表現が発達している英語と比べれば、日本語には少ないということは否定できないが、日英語の比較という視点のみでは、(3)～(6)のような文が日本語にも存在することを見逃しがちである。本稿では、現代日本語の文学作品を調査することによって、無生物主語の他動詞文の使用実態を明らか

にしたい。

2. 先行研究

無生物主語の他動詞文は不自然であるという意見に対して、角田太作（1991：49）は無生物主語の他動詞文であっても、不自然でない文（例7～9）も多数あると指摘している⁴⁾。

(7) 津波が 三陸地方を 襲った。 (角田 1982：206)

(8) 大雨が 交通を 止めた。 (角田 1982：206)

(9) 大水が 家屋を 押し流した。 (角田 1991：49)

(1) (2) と (7)～(9) の相違に関して角田太作（1991：48-51）は名詞句階層⁵⁾を援用し、説明している。

名詞句階層は (10) のように、Silverstein⁶⁾ (1976) が名詞句を分類し、これらの名詞句がある種の階層をなすことを示したものである。Silverstein によると、この階層は動作者になりやすいか、あるいは動作の対象になりやすいかという度合いを表す。すなわち、階層で高い方 ((10) の左側の名詞句) は動作者になりやすい。逆に、低い方 ((10) の右側の名詞句) は動作の対象になりやすい。(角田太作 1991：39)

(10) 代名詞			名詞		
1人称	2人称	3人称	親族名詞、人間名詞 固有名詞 ⁷⁾	動物名詞	無生物名詞
					自然の力 の名詞 ⁸⁾
					抽象名詞、 地名

無生物主語の他動詞文に関して、名詞句階層において、動作の及ぶ対象（目的語）が、無生物の主語より高いものならば、不自然な表現 (1) (2) になるが、逆に、(7) (8) (9) のようなものは自然な表現になるとしている（角田太作 1991：48-51）。

本稿では角田太作（1991：48-51）の説と、現代の日本語の文学作品に現れた無生物主語の他動詞文のデータとを照らし合わせ、目的語が主語より名詞句階層において、高いものが実際の文章に現れているのかどうか、調査する⁹⁾。

3. 調査方法

3.1 調査資料

本稿では調査対象として1980年代以降の文学作品7冊から、無生物主語他動詞文のデータを392例収集した。

3.2 主語の語彙的意味

まず、主語となる名詞句を語彙的意味の上から分類した。その分類の基準は国立国語研究所の『分類語彙表―増補改定版―』（2004）（以下『語彙表』と略称）に基づいた。同書では、名詞は（11）のように5分類されている。

- （11）人間活動の主体：私、友、先生、故郷、国、都市、社会、学校、団体など
 人間活動―精神および行為：安心、自信、感想、学問、言動、宣言、仕事など
 生産物および用具：ゴム、服、食べ物、住居、家具、かばん、電気、乗り物など
 自然物および自然現象：地震、光、におい、空気、川、植物、動物、体、病気など
 抽象的關係：事柄、理由、出現、美醜、往復、接触、時間、場所、形、何など

（10）の名詞句階層と（11）の語彙的分類を照らし合わせてみると、名詞句階層における「代名詞」「親族名詞」「固有名詞」と「人間名詞」は『語彙表』の「人間活動の主体」のカテゴリーに入る。「動物名詞」と「自然の力の名詞」は『語彙表』の「自然物および自然現象」の中に含まれる。「抽象名詞」は『語彙表』の「人間活動―精神および行為」と「抽象的關係」に分けられる。「無生物名詞」の中の「地名」（機関ではなく、場所として捉える場合）は「抽象的關係」の中に入れることにする。

『語彙表』の「生産物および用具」は名詞句階層において提示されていない。「抽象名詞」及び「地名」との階層性の差は判断できないが、「無生物名詞」に入れることにする。

3.3 目的語の語彙的意味

無生物主語の文では、目的語と主語の名詞句階層とどちらが高いかに注目することになるため、目的語となる名詞の語彙的意味を合わせて分析する必要がある。まず、目的語を無生・有生に分けて考え、無生物の主語と同じ階層の「無生物名詞」¹⁰⁾と、無生物の主語より階層が高い「生物名詞」¹¹⁾に分ける。後者は、角田太作（1991：48-51）の「自然さ」についての定義に反するものである。

目的語が「無生物名詞」である場合は、「自然の力の名詞」であるか否かに注目する。目的語が「自然の力の名詞」で、主語が（10）の名詞句階層において、「自然の力の名詞」より低い階層（例えば、「抽象名詞」「地名」）にあれば、角田太作（1991：48-51）の「自然さ」についての定義に反するものと考ええる。

さらに、目的語が「自然の力でない無生物名詞」は、目的語と主語の階層性に差が見られるかどうか分析する。

3.4 調査項目

調査項目は表1のようにまとめられる。

表 1

目的語の語彙的意味 主語の語彙的意味	目的語が無生物名詞			目的語が生物名詞 ¹²⁾
	目的語が自然の力でない		目的語が自然の力	
	非同一実体(主語・目的語)	同一実体(主語・目的語)		
人間活動の主体	A-1	B-1	C-1	D-1
人間活動—精神および行為	A-2	B-2	C-2	D-2
生産物および用具	A-3	B-3	C-3	D-3
自然物および自然現象	A-4	B-4	C-4	D-4
抽象的關係	A-5	B-5	C-5	D-5

主語の語彙的意味は、主語となった名詞の語彙的意味の区分であり、5種類に分けてある。目的語の語彙的意味は、まず、目的語が無生物名詞であるかどうかによって「目的語が無生物名詞」の場合と「目的語が生物名詞」の場合に分けて、分析する。また、「目的語が無生物名詞」の場合、目的語が自然の力の名詞であるかどうかによって、「目的語が自然の力の無生物名詞」と「目的語が自然の力でない無生物名詞」に分類し、さらに「目的語が自然の力でない無生物名詞」に関しては、主語と目的語が同一実体であるかどうかによって、「非同一実体」と「同一実体」とに細分した。各項目の例文は下記のとおりでである。

A-1 先にここを通過した部隊がすべてをあさり尽し奪っていた。(『深い河』p. 140)

A-2 ウィークエンドの三日間の閉じ籠りは先生の心のバランスをうまく取っている。
(『彼岸先生』p. 138 変更¹³⁾)

A-3 ほうっておくと閉まってしまうのか、ゴミ用の青色のポリバケツが、ドアを押さえていた。
(『異人たちとの夏』p. 77)

A-4 窓から吹いてきた風が山をさらって、紙屑を床に飛ばしたのだ。
(『蹴りたい背中』p. 10)

A-5 あの夜の出来事が気持をきりかえてくれるのだ。(『異人たちとの夏』p. 59)

B-1 東京の街がほとんどかつての面影を残していない。
(『異人たちとの夏』p. 36 変更)

B-2 私と目が合うと、奇妙なひとり言はメロディをともなった。
(『彼岸先生』p. 299)

B-3 スタンドが、部屋のなかにやわらかいあかりを投じている。
(『冷静と情熱の間』p. 87)

B-4 桜がブランコに覆い被さるように枝を伸ばし、あとからあとから花びらを振り

- 落としている。 (『家族シネマ』 p. 46)
- B-5 一つ一つが物語を喚起する。 (『冷静と情熱の間』 p. 22)
- C-1 A社は去年大きな被害を蒙った¹⁴⁾。
- C-2 彼の闘志が自然を征服した。
- C-3 反射鏡が太陽光を跳ね返している。 (『蹴りたい背中』 p. 4 変更)
- C-4 細かい埃りが、窓からさす陽を受けている。 (『蹴りたい背中』 p. 4 変更)
- C-5 頂上は強烈な陽射しをうけている。
- D-1 西洋の基督教が布教の名を借りて多くの土地を奪い、人を殺したことも知っ
ているわ。 (『深い河』 p. 69)
- D-2 すると、急に恐怖が私を捉えた。 (『異人たちとの夏』 p. 159)
- D-3 私は自分が列車に乗っているというよりも、列車が私をまわりの空気ごととり
囲み、荷物のように移動させているように感じる。 (『冷静と情熱の間』 p. 25)
- D-4 このあと、村の近くに大きな工場がたって、その廃液が海をよごし、魚を苦し
め、漁村の人を病気にした。 (『深い河』 p. 237 変更)
- D-5 あの時も子供の沼田には抗うことのできぬ事情が、クロと彼とを引き離した。
(『深い河』 p. 126)

4. 目的語が「無生物名詞」である場合

目的語が無生物名詞の中で高い階層に位置している「自然の力の無生物名詞」であるか、「自然の力でない無生物名詞」であるかに二分して考察する。

4.1 目的語が「自然の力でない無生物名詞」

目的語が「自然の力でない無生物名詞」の場合、主語と目的語が同一実体であるかどうかによって分けられる。主語と目的語が二つの実体である場合は、両者の階層性の差を考察する必要がある。このような例は211例あり、総例文数の53.8%を占めている(例5)。一方、主語と目的語が同一実体である場合は、主語と目的語の階層性の差を考察する必要はないと思われる。116例あり、総例文数の約29.6%を占めている(例12)。

- (5) 風が私の髪を道路沿いの柳の枝のように吹きあげる。 (『家族シネマ』 p. 74)
- (12) 暗くて形しか分からなかった家の細部——窓や屋根についているアンテナの輪
郭なんかが、徐徐に姿を現し始める。 (『蹴りたい背中』 p. 138)

4.1.1 主語と目的語が非同一実体である場合

主語と目的語の階層性の差を考察するため、主語となる名詞の語彙的意味と、目的語となる名詞の語彙的意味を合わせて分析する必要がある。『語彙表』にしたがい、「人間活動の主体」「人間活動—精神および行為」「生産物および用具」「自然物および自然現

象」「抽象的關係」の5種類に分け、考察を進める。

I 人間活動の主体=A-1

本稿の「人間活動の主体」は人称代名詞、人間名詞など生物を現す名詞を除外し、人間の活動を背後に強く意識させる政府、会社、学校などの機関を指す。

機関、団体のような名詞は人間が背景に暗示されているから他動詞文の主語になりやすいと思われるが、収集したデータでは主語が「人間活動の主体」になった文は16例で、5種類の中で、最も少なかった。

- (13) 先にここを通過した部隊がすべてをあさり尽し奪っていた。(『深い河』 p. 140)
- (14) この国はインデイル・ガンジーのカリスマ的な存在でどうにか秩序を保っているのですが。(『深い河』 p. 210)
- (15) マーヴの会社が家賃をだしている。(『冷静と情熱の間』 p. 165 変更)
- (16) あの露店は銅の壺を売っている。(『深い河』 p. 126 変更)

今回の調査対象は小説に限られている。小説というジャンルでは、他動詞文で「人間活動の主体」の名詞が主語となる傾向が低くなる可能性がある。今後は、小説に限らず、新聞社説などの他のジャンルも調査して再分析する必要がある¹⁵⁾。

目的語が「自然物および自然現象」「人間活動の主体」の名詞である例は観察されなかった。最も多く現れたのは「抽象的關係」の名詞(例13、14)である。それに次いで、(15)のような目的語が「人間活動—精神および行為」の名詞の例や、(16)のような目的語が「生産物および用具」の名詞の例が現れた。

II 人間活動—精神および行為=A-2

主語が「人間活動—精神および行為」となった例は、46例あり、後述する「自然物および自然現象」に次いで、高い割合を占めている。主語が「人間の行為」(例17、18、19)を表すものが最も多く現れた。

- (17) それらの行動が、空しさの上に更に空しさを重ねた。(『深い河』 p. 60 変更)
- (18) その慰めが塚田の苦しみを癒したか、どうかは木口にはわからない。(『深い河』 p. 167)
- (19) ウィークエンドの三日間の閉じ籠りは先生の心のバランスをうまく取っている。(『彼岸先生』 p. 138 変更)

他に、「人間の精神活動」を表す名詞(例20、21)、「人間の性質・特徴」を表す名詞(例22、23)、「言語作品」を表す名詞(例24、25)の例も見られた。

- (20) 時計をとりに行く口実をつくるためにわざと置き忘れたのかもしれないという

考えが頭を掠めた。

(『家族シネマ』 p. 63)

- (21) 自分では、十二才からの緊張が、甘えることを不器用にしたと考えている。

(『異人たちの夏』 p. 74)

- (22) 私のこわばりが妻の保護欲求をはねつけてしまったのかもしれない。

(『異人たちの夏』 p. 74 変更)

- (23) その妙な誠実さは、かえって私の胸を打った。

(『キッチン』 p. 89)

- (24) 昨日と合わせて百二十一枚であり、題材によっては一回分の枚数になっていたが、今度のドラマは饒舌を狙っていた。

(『異人たちの夏』 p. 95)

- (25) こちらの心情を無視した自分だけの身の上話は美津子の関心をほとんど惹かなかった。

(『深い河』 p. 200)

目的語が「人間活動の主体」「生産物および用具」の名詞となった例は観察されなかった。「人間活動—精神および行為」の名詞が目的語となったものは (18) (22) (24) (25) の例に見られる。「抽象的關係」の名詞が目的語となったものは (17) (19)、「自然物および自然現象」の名詞が目的語となったものは (20) の例に見られる。なお、「自然物および自然現象」の名詞は、砂、川のような自然物や雨、台風、地震のような自然現象の名詞は出現しない。ここで現れた「自然物および自然現象」の名詞は「身体名詞」に限られている。

Ⅲ 生産物および用具=A-3

「生産物および用具」は、人間が直接に活動の結果として作り出した物および作り出すために利用するものである。全部で 23 例ある。

「生産物および用具」の中で、どのようなものが他動詞文の主語になりやすいかは特定できない。収集したデータでは、「乗り物」(26)「衣料品」(27)「電気」(28)「容器」(29) 住居 (30) などの名詞が主語になるのが観察された。

- (26) その時、古ぼけた——というより日本ではとくに廃車になるようなバスが埃をあげてやっと広場に入ってきた。

(『深い河』 p. 170)

- (27) 冬で、ダニエラの黒い手袋が焼き栗の袋をつかんでいた。

(『冷静と情熱の間』 p. 63)

- (28) この時、庭園灯に灯がつき、灯は吹出もののできた大津の横顔を照らした。

(『深い河』 p. 302)

- (29) ほうっておくと閉まってしまうのか、ゴミ用の青色のポリバケツが、ドアを押さえていた。

(『異人たちの夏』 p. 77)

- (30) マンションは、相変わらず環状八号線の車のエンジン音と排気ガスを浴びて、耐えしのぶように窓という窓を閉ざしていた。

(『異人たちの夏』 p. 141)

目的語が「人間活動の主体」の名詞となった例は観察されなかった。「生産物および用具」が主語になった場合、目的語となるのは同じレベルである「生産物および用具」(27、29) が最も多いことが観察された。

IV 自然物および自然現象=A-4

主語が「自然物および自然現象」となった文は83例あり、5種類の中で、最も多かった。「自然現象」¹⁶⁾ (例31、32)、「自然物」¹⁷⁾ (例33、34)、「身体名詞」(35、36)の意味を表す名詞が主語になるのが観察された。

(31) 窓から吹いてきた風が山をさらって、紙屑を床に飛ばしたのだ。

(『蹴りたい背中』 p. 10)

(32) つづけざまに叫んだので部屋を出ると灯油の臭いが鼻を衝いた。

(『家族シネマ』 p. 71)

(33) 車をおりと雨はあがっていて、月がビルの前のスペースを照らしていた。

(『異人たちの夏』 p. 90)

(34) このあと、村の近くに大きな工場がたって、その廃液が海をよごし、魚を苦しめ、漁村の人を病気にした。

(『深い河』 p. 237 変更)

(35) にな川の指が飴をつまみ上げる。

(『蹴りたい背中』 p. 97)

(36) フェデリカの骨ばった手が、私の膝をぼんぼんとたたいた。

(『冷静と情熱の間』 p. 174)

それらの中では、「自然現象」が最も多く現れた。この類に(10)の名詞句階層に挙げられた「自然の力の名詞」も含まれている。名詞句階層で見られるように、無生物名詞の中で「自然の力の名詞」が最も階層が高い。このような文は、(31)の例を入れ、全部で26例観察された。

(37) よく晴れた午後で、風も雲もなく、金色の甘い陽ざしがなにもない私の故郷であった部屋をすかしていた。

(『キッチン』 p. 46)

(38) 風が前髪を揺らし、上に広がる空は白く、下に広がる運動場からはバレーボールで遊んでいる男子グループの歓声が聞こえてきて、のんびりという気持ち。

(『蹴りたい背中』 p. 65)

目的語が「人間活動の主体」の名詞となった例は観察されなかったが、他の意味の名詞はすべて目的語となり得ることがわかった。

V 抽象的關係=A-5

「抽象的關係」は出来事（例えば、事情、こと）、空間（例えば、外、上、下）、時間（例えば、昨日、日曜日、夕方）、数量（5 kg、全部、一人）、関係（例えば、原因、条件）などを指す。主語が「抽象的關係」の意味を表す例文数は43例で、「人間活動—精神および行為」の例文数とほとんど変わらない。「出来事」（例39、40）、「代名詞・不定代名詞」（例41、42）、「関係」（例43、44）を表す名詞（句）が観察された。

(39) あの夜の出来事が気持をきりかえてくれるのだ。 （『異人たちとの夏』p. 59）

(40) 医者が素直に承諾してくれたということは、もう手のうち様のないことを暗示していた。 （『深い河』p. 10）

(41) 勿論父に似ているからだだった。それが私の警戒心を、さからいがたく解いていた。 （『異人たちとの夏』p. 48）

(42) 椅子が並んでいなくて、どこに立って見てもいいみたいで、それが客の士気を高めた。 （『蹴りたい背中』p. 115）

(43) 宗教の違いが昨日、女性首相の死を生んだ。 （『深い河』p. 316）

(44) 十メートルの差が、「事件」を生きることと語ることと画然と分ける。 （『彼岸先生』p. 396）

他に、「時間名詞」が主語となったものが1例のみ観察された。

(45) 長い夏休みは私と絹代の間にさらに距離を生むだろう。 （『蹴りたい背中』p. 135）

収集したデータから、5種類の意味の名詞がすべて目的語となり得ることがわかった。上記の例の目的語を見ると、(39) (41) は「人間活動—精神および行為」を表す名詞で、(40) (42) (44) (45) は「抽象的關係」を表す名詞、(43) は「自然物および自然現象」を表す名詞である。無生物名詞の中で最も高い階層の「自然の力の名詞」は現れない。

4.1.2 主語と目的語が同一実体である場合=B-1~B-5

形式としては目的語と主語が独立したものとして文中に現れているが、意味としては同一のものである。目的語が主語の体の一部分或いは、体そのもの（例46）と、目的語が主語の性質、特徴を表すもの（例47）が観察された。

(46) 太陽が地平線上に頭を出した。

(47) 医療技術は目覚しい進歩を遂げてきた。

このような例文は、主語と目的語が同一実体であるため、主語と目的語の階層性の差を考慮する必要がないと思われる。本稿では、主語を5種類の語彙的意味の名詞に分類

するにとどめる（表1を参照）。

調査した結果、出現率の高いものから順に「自然物および自然現象」、「生産物および用具」、「人間活動—精神および行為」、「抽象的關係」、「人間活動の主体」となった。(48) (49) は主語が「自然物および自然現象」の名詞の例、(50) は主語が「生産物および用具」の名詞の例、(51) は主語が「人間活動—精神および行為」の名詞の例、(52) は主語が「抽象的關係」の名詞の例、(53) は主語が「人間活動の主体」の名詞の例である。なお、(49) のような、「自然の力の名詞」が主語となる文は全部で7例あった。

(48) 桜がブランコに覆い被さるように枝を伸ばし、あとからあとから花びらを振り落としている。 (『家族シネマ』 p. 46)

(49) 蜘蛛の糸よりも細い雨があちこちに線を引いた。 (『家族シネマ』 p. 89)

(50) スタンドが、部屋のなかにやわらかいあかりを投じている。 (『冷静と情熱の間』 p. 87)

(51) 私と目が合うと、奇妙なひとり言はメロディをともなった。 (『彼岸先生』 p. 299)

(52) 一つ一つが物語を喚起する。 (『冷静と情熱の間』 p. 22)

(53) 東京の街がほとんどかつての面影を残していない。 (『異人たちとの夏』 p. 36 変更)

4.2 目的語が「自然の力の名詞」

自然の力を指す名詞には地震、雷、火事、津波、大水などがある。

目的語が「自然の力の名詞」で、主語が名詞句階層において、「自然の力の名詞」より低い階層の場合、角田太作（1991：48-51）の「自然さ」についての定義に反するものと考えられる。そのような例は今回の調査では2.3%の割合を占めている。主語の名詞の語彙的意味によって、次の5種類に分けて考察する。

I 人間活動の主体=C-1

主語が「人間活動の主体」の例は観察されなかった。

II 人間活動—精神および行為=C-2

主語が「人間活動—精神および行為」の例も観察されなかった。

III 生産物および用具=C-3

目的語が「自然の力の名詞」の他動詞文で、主語が「生産物および用具」の文が7例観察され、5種類の意味の中で最も多かった。

(54) 急行の電車が暑くて埃っぽい風を引き連れてきた。

(『蹴りたい背中』 p. 109 変更)

(55) 白い漆喰とくすんだ煉瓦が日をうけている。

(『冷静と情熱の間』 p. 37 変更)

(56) にな川の家窓は陽の光を浴びている。

(『蹴りたい背中』 p. 40 変更)

(57) 新築の家の白い壁が、日光を照り返している。

(『蹴りたい背中』 p. 91 変更)

(58) 反射鏡が太陽光を跳ね返している。

(『蹴りたい背中』 p. 4 変更)

上記の例文から多くの制限があることがわかる。(54) の、主語は交通機関で、『語彙表』では「生産物および用具」のカテゴリーに入っているが、「生物名詞」の性質に近いものと思われる。他の例に関しては、述語動詞を観察してみると、(55) (56) の述語動詞は語彙的な受身動詞で、(57) (58) の述語動詞「照り返す」「跳ね返す」は、目的語に対して働きかけをしない動詞である。つまり、(55)～(58) の例文は、いずれも動作が主語から目的語へ向かうものではないことがわかる。

IV 自然物および自然現象=C-4

主語が「自然物および自然現象」の文は、下記の2例のみ観察された。「自然の力の名詞」が主語となる例は観察されなかった。

(59) 細かい埃りが、窓からさす陽を受けている。

(『蹴りたい背中』 p. 4 変更)

(60) 川が夕陽を反射してきらきら光っている。

(『蹴りたい背中』 p. 111 変更)

主語が「自然物および自然現象」の例も観察された。ただし、Ⅲの「生産物および用具」と同様に、述語動詞が語彙的な受身動詞または働きかけのないものという制限がある。

V 抽象的關係=C-5

主語が「抽象的關係」の例は観察されなかった。

5. 目的語¹⁸⁾が「生物名詞」である場合

目的語が「生物名詞」のものは、総例文数の14.3%の割合を占めていた。これらの文は角田太作の「自然さ」についての定義に反するものである。主語である名詞の意味によって5種類に分けて考察する。

I 人間活動の主体=D-1

機関、団体のような名詞は、人間が背景に暗示されているので、他動詞文の主語になりやすいと思われる。しかし、収集したデータでは、1例しか見られなかった。5種類の中で最も少なかった。

- (61) 西洋の基督教が布教の名を借りて多くの土地を奪い、人を殺したことも知って
いるわ。(『深い河』 p. 69)

II 人間活動—精神および行為=D-2

目的語が「生物名詞」の例文では、主語が人間活動を表す名詞のものが全部で 20 例で、最も高い割合を占めている。

主語が「人間の精神活動」を表すものには、次のような例が観察された。

- (62) すると、急に恐怖が私を捉えた。(『異人たちの夏』 p. 159)
(63) 自分では意識しなかったが、私の孤独が父と母を呼び戻したのかもしれないのだから。(『異人たちの夏』 p. 151)
(64) 恋の恨みは食い物の恨みと同様、人を攻撃的にするから。(『彼岸先生』 p. 353)
(65) 幻覚が私を優しく慰撫した。(『異人たちの夏』 p. 97 変更)

(62) (63) (64) の主語は心理的な状態を表す名詞で、(65) は認識、思考活動を表す名詞である。いずれも人間の内部で発したものであるため、人間が動作主として潜在していると考えられる。

次の例文は主語が「人間の行為」「言語活動」を表すものである。

- (66) その遊びは、執筆中の沼田をしばしば慰めて、それはまるで仲のいい兄と弟との戯れようだった。(『深い河』 p. 122)
(67) 父の暴力、母の性的な放埒さが私に恥辱をもたらした。(『家族シネマ』 p. 87 変更)
(68) むしろ大津の言葉が彼女を傷つけた。(『深い河』 p. 194)
(69) いつでもつかまえられるのに、声は私をつかまえない。(『冷静と情熱の間』 p. 10)

(66) (67) は「人間の行為」で、(68) (69) は人間の動作によって、発した「言語活動」である。いずれも、人間が動作主として潜在していると考えられる。なお、他の例と違い、(67) では、動作の影響を受けた人間は二格として現れている。

「人間の性質・特徴」を現すものも見られた。

- (70) 父の暴力、母の性的な放埒さが私に恥辱をもたらした。(『家族シネマ』 p. 87 変更)

「人間の精神活動」「人間の行為」「人間の性質・特徴」の名詞は名詞句階層においては、「抽象名詞」に該当し、階層が最も低いと考えられる。しかし、そのような名詞がどうして人間を目的語とする他動詞文において、主語になり得るのだろうか。筆者は、

主語となった名詞に人間が動作主として潜在しているからではないかと考える。これらの名詞はいずれも人間に付随したもので、精神活動も人間の行為も、人間が主体的に動作を行うことと不可分である。

Ⅲ 生産物および用具=D-3

「生産物および用具」は、下記の3例のみ見られた。

(71) 私は自分が列車に乗っているというよりも、列車が私をまわりの空気ごとく
囲み、荷物のように移動させているように感じる。 (『冷静と情熱の間』 p. 25)

(72) 歩道では一台の馬車が、大連港に向う母と子とを待っていた。

(『深い河』 p. 118)

(73) それからそのハンマーは私を一撃した。

(『異人たちとの夏』 p. 86)

(71) (72) は交通機関で、「電車」「バス」「船」のように、運動の主体として考えられるものは、「無生物名詞」より「生物名詞」の性質に近いのではないと思われる。

(73) の主語の「ハンマー」は先行する文脈をみると、実際の生産道具を現すのではなく、一種の隠喩であることがわかる。「私を一撃した」の動作主は生産道具の「ハンマー」ではなく、「目の前にいる女性が30年前に死んだお母さんとわかったこと」であることが読みとれる。

Ⅳ 自然物および自然現象=D-4

主語が「自然物および自然現象」のものは15例見られた。(74) (75) は自然界にある具体名詞で、(76) (77) は身体名詞である。

(74) このあと、村の近くに大きな工場がたって、その廃液が海をよごし、魚を苦しめ、漁村の人を病気にした。 (『深い河』 p. 237 変更)

(75) この聖なる河は、人間だけではなく、生きるものすべてを包み込んで運んでいく。 (『深い河』 p. 91)

(76) 底の広い帽子をかぶり、サンクラスをかけた横顔は江波をひきつけた。

(『深い河』 p. 221)

(77) 順正の両手が私を抱きとめた。

(『冷静と情熱の間』 p. 257)

主語が「自然現象」のもの (78、79、80) も観察された。「自然の力の名詞」が主語となるものは例文 (80) で、1例しか現れなかった。

(78) 女の身体の甘い匂いと体温が私を包んでいる。 (『異人たちとの夏』 p. 177)

(79) マニカルニカ・ガートでは白い煙が川面に流れ、白い煙は人生をすべて終えた者たちを焼いている。 (『深い河』 p. 322)

「自然物および自然現象」は名詞句階層において、「無生物名詞」のカテゴリーにあり、「生物名詞」より階層が低い。収集したデータを分析すると、生物名詞を目的語とする他動詞文では、「自然物」「身体名詞」「自然現象」は主語になりやすいことがわかった。「自然物」と「自然現象」は人間と同じように意志性を持って行動するものと捉えることができ、「身体名詞」は、体の部分から背景に人間が暗示されるからではないかと思われる。

V 抽象的關係=D-5

主語が、「出来事」(例 81、82)、「代名詞・不定代名詞」(例 83、84)、「力」(例 85)を表す名詞(句)が観察された。

(81) あの時も子供の沼田には抗うことのできぬ事情が、クロと彼とを引き離した。

(『深い河』 p. 126)

(82) 部屋のなかはおもてとおなじように暗く、なにもかもが水音にとじこめられていて、そのことが私たちを奇妙に正直にしていた。 (『冷静と情熱の間』 p. 31)

(83) マーヴが怯えている。それは私をほんとうにたまらなくするが、私はマーヴを安心させてあげることができない。 (『冷静と情熱の間』 p. 123)

(84) わからないが、自分をこえた何かが彼女にそうさせたのだ。その何かは彼女を大津の住むこのヴァーラーナスィまで連れてきた。 (『深い河』 p. 188 変更)

(85) ケイの力が、まだ私を支配している。 (『異人たちとの夏』 p. 202)

上記のものは(84)以外は、すべての主語に動作が潜在しており、Iの「人間の行為」を表す名詞の性質に近いと考えられる。(83)は、主語を「人間の行為」を表す名詞に置き換えても、意味上、差し支えない。

(83') マーヴの怯えが私をほんとうにたまらなくした。

「抽象的關係」も「人間活動—精神および行為」と同様に、名詞句階層において「抽象名詞」として最も階層が低いにもかかわらず、主語になり得る理由として、ここでも人間の行為が潜在していることが考えられるだろう。

調査を通して、「出来事名詞」「代名詞・不定代名詞」「力」のような名詞は主語になり得ることがわかった。しかし、同じ「抽象的關係」の時間や空間、数量、関係などを表す名詞は観察されなかった。「抽象的關係」では、動作性のある名詞と動作性のない名詞と2種類のものがあって、主語になる可能性も異なっているのではないかと思われる。

6. 調査結果のまとめ

表 2

主語の語彙の意味 \ 目的語の語彙の意味		目的語が無生物名詞			目的語が生物名詞 ¹⁹⁾	合 計
		目的語が自然の力でない		目的語が自然の力		
		非同一実体 (主語・目的語)	同一実体 (主語・目的語)			
人間活動の主体		16 (4.1%)	4 (1.0%)	0 (0%)	1 (0.3%)	21 (5.4%)
人間活動—精神および行為		46 (11.7%)	14 (3.6%)	0 (0%)	20 (5.1%)	80 (20.4%)
生産物および用具		23 (5.9%)	42 (10.7%)	7 (1.8%)	4 (1.0%)	76 (19.4%)
自然物および 自然現象	自然の力	26 (6.6%)	7 (1.8%)	0 (0%)	1 (0.3%)	146 (37.2%)
	その他	57 (14.5%)	39 (9.9%)	2 (0.5%)	14 (3.6%)	
抽象的関係		43 (11.0%)	10 (2.6%)	0 (0%)	16 (4%)	69 (17.6%)
合計		211 (53.8%)	116 (29.6%)	9 (2.3%)	56 (14.3%)	392 (100%)

表2から、次のようなことが言える。

まず、目的語の語彙の意味からいえば、出現率は高いものから順に「非同一実体（主語・目的語）」、「同一実体（主語・目的語）」²⁰⁾、「目的語が生物名詞」、「目的語が自然の力」となった。その中で、目的語が無生物名詞の文は、「非同一実体（主語・目的語）」、「同一実体（主語・目的語）」、「目的語が自然の力」で、全部で336例あり、総例文数の85.7%である。無生物主語の他動詞文では、目的語が「無生物名詞」となるものが多いことがわかった。

角田太作（1991：48-51）は、無生物主語の他動詞文で、名詞句階層において、無生物の主語が目的語より高いものならば、自然な表現になるとしている。さらに、無生物名詞の中で、自然の力を表す名詞は最も高い位置を占めると述べている。つまり、主語が自然の力を表す名詞の場合、目的語が同じく自然の力を表す名詞、または階層が低い無生物名詞であれば、自然な表現となる。本稿の用例では、表2の「目的語が無生物名詞」で、「主語が自然物及び自然現象」の「自然の力」の項目（影で表示）は、角田太作の「自然さ」についての定義に即したものである。「非同一実体（主語・目的語）」26例、「同一実体（主語・目的語）」7例、目的語が「自然の力」の名詞0例を合わせて、33例あり、総例文数の8.4%の割合を占めている。ただし、他の91.6%の例が全て角田太作の「自然さ」の定義に反しているかどうかは検討の余地がある。

「同一実体（主語・目的語）」の場合は、主語と目的語が同一のもので、階層に差がないため、角田太作の説に反しているとはいえない。「非同一実体（主語・目的語）」の用例で、主語が「自然物および自然現象」の「自然の力」の名詞の文を除いたもの（下線で表示）は、185例あり、総例文の47.2%である。名詞句階層には、該当するも

のがないため、目的語と主語の階層性の差は判定できない。例文を見ると、「人間活動—精神及び行為」が主語で、「抽象的關係」の名詞（句）が目的語の例（21）も見られれば、逆に「抽象的關係」の名詞が主語で、「人間活動—精神および行為」が目的語である例（39）も見られた。主語と目的語の間に階層上の差ははっきり見られなかった。

(21) 自分では、十二才からの緊張が、甘えることを不器用にしたと考えている。

（『異人たちとの夏』p. 74）

(39) あの夜の出来事が気持をきりかえてくれるのだ。（『異人たちとの夏』p. 59）

主語が目的語より階層が低い場合、角田太作の「自然さ」についての定義に反していると考えられる例（斜体字で表示）には次のようなものがあった。一つ目は「目的語が生物名詞」の例である。もう一つは、目的語が「自然の力」の無生物名詞で、主語が「人間活動の主体」「人間活動—精神および行為」「生産物および用具」「抽象的關係」のいずれかにあたる例である。このような例は全部で65例²¹⁾、総例文数の16.6%である。

目的語が「生物名詞」の場合は、名詞句階層上において、「抽象名詞」として、階層が最も低い「人間活動—精神および行為」「抽象的關係」が主語になるものが、5.1%および4%の割合で出現し、稀ではないことが観察された。主に「人間の精神活動」(64)「人間の行為」(66)「人間の性質・特徴」(70)「出来事名詞」(81)のような、背後に人間の動作が潜在している抽象名詞が主語になりやすく、「自然物および自然現象」(74)も主語になりやすいことがわかった。一方、「生産物および用具」の名詞は主語になりにくいことがわかった。そのため、「生産物および用具」は「人間活動—精神および行為」「抽象的關係」より階層が低いと考えられる。

(64) 恋の恨みは食いの恨みと同様、人を攻撃的にするから。（『彼岸先生』p. 353）

(66) その遊びは、執筆中の沼田をしばしば慰めて、それはまるで仲のいい兄と弟との戯れようだった。（『深い河』p. 122）

(70) 父の暴力、母の性的な放埒さが私に恥辱をもたらした。

（『家族シネマ』p. 87 変更）

(81) あの時も子供の沼田には抗うことのできぬ事情が、クロと彼とを引き離した。

（『深い河』p. 126）

(74) このあと、村の近くに大きな工場がたって、その廃液が海をよごし、魚を苦しめ、漁村の人を病気にした。

（『深い河』p. 237 変更）

目的語が「自然の力の名詞」の場合、「生産物および用具」「自然物および自然現象」のような名詞が主語になり得ることがわかった。ただし、述語動詞が働きかけのない動詞（57）、または語彙的な受身動詞（55）という制約が見られた。また、述語動詞が動

作動詞でも、「交通手段の名詞」(54)は主語になり得るが、バスのような「交通手段の名詞」は物質名詞であっても、運動の主体として考えられるため、階層は「自然の力の名詞」の目的語より高いか、または同じレベルに位置するものと思われる。

(57) 新築の家の白い壁が、日光を照り返している。 (『蹴りたい背中』p. 91 変更)

(55) 白い漆喰とくすんだ煉瓦が日をうけている。 (『冷静と情熱の間』p. 37 変更)

(54) 急行の電車が暑くて埃っぽい風を引き連れてきた。

(『蹴りたい背中』p. 109 変更)

7. おわりに

本稿では角田太作(1991: 48-51)の説と、現代の日本語の文学作品に現れた無生物主語の他動詞文のデータとを照らし合わせ、角田太作の「自然さ」についての定義に反する例が実際の文章に現れているかどうか、無生物主語の他動詞文の使用実態を調査した。

その結果、角田太作の「自然さ」についての定義に反している例は総例文数の16.6%の割合を占めることが観察された。この場合、「人間の精神活動」や「人間の行為」、「出来事名詞」のような抽象名詞、および「自然物・自然現象」の名詞は主語になり得るが、「生産物および用具」のような具体名詞は主語になりにくいことがわかった。

一方、角田太作の「自然さ」についての定義に即している例は総例文数の8.4%しか観察されなかった。残りの75%の用例は、角田太作(1991: 48-51)が言及していないものである。主語と目的語が同一実体のものと、主語と目的語が非同一実体のものが含まれている。前者は主語と目的語が同じ「もの／こと」を指しているため、階層性の差を考慮する必要がない。後者は、主語及び目的語となる名詞が、Silversteinの名詞句階層において、その位置付けが定められていないため、主語になる名詞と目的語になる名詞の、どちらの階層が高いか判定できない。こういうものは総例文数の47.2%の割合を占めており、無生物名詞の名詞句階層を発展させ、より精緻化する必要性が感じられた。今回の調査では、主語の名詞と目的語の名詞で階層性の差は明確には観察できなかったが、今後、データを増やした上で再調査し、無生物名詞の名詞句階層の作成を試みたい。

注

- 1) 「無生物主語の他動詞文」に関する研究は、述語が他動詞である文を含め、使役文も考察の対象とされているが、本稿は紙幅の関係で、「使役文」を除外し、「述語が他動詞である文」のみを考察した。
- 2) 「無生物名詞」とは、人または動物でないものと捉える。そのため、自然科学では有生物と考えている植物(例: 木)や生産物・道具(例: 布)などの具体名詞、

自然現象名詞（例：雨）、抽象名詞（例：説教）などが調査の対象となる。

- 3) 「主語」の定義は『日本語教育事典』（1982）に従い、文の成分の一つで、述語の表す意味（種類、属性、状態、情意、作用・変化など）の主体を示すものと考えられる。後ろに助詞「が」「は」「も」などのついた形、あるいは助詞の脱落などの形で示されたりしているが、「が」のついた形に置き換えることができる場合に主語と認める。
- 4) (7)～(9) の例文は文章語的で、日常会話での使用は頻度が低い。このように、無生物主語の他動詞文の使用は、日本語では文体の差を反映する。
- 5) 名詞句階層は、Silverstein (1976) が豪州原住民語の格組織の問題に関連して提案したもの。
- 6) 角田 (1991) から引用したもの。原作の出典：Silverstein, Michael. 1976. Hierarchy of features and ergativity. In R. M. W. Dixon (ed.), Grammatical categories in Australian languages, 112-71. Canberra: Australian Institute of Aboriginal Studies, and New Jersey: Humanities Press.
- 7) ここの固有名詞は人の名前を指す。例えば「太郎さん」「花子ちゃん」など。
- 8) 自然の力を指す名詞には地震、雷、火事、津波、大水などがある。
- 9) 本稿は、実際の日本語において、どのようなタイプの無生物主語が現れるかを報告することが目的であるため、データの自然さ、不自然さについての判定は行わないことにする。
- 10) (10) の名詞句階層上において、「無生物名詞」の部分に該当する。
- 11) (10) の名詞句階層上において、高い順に「代名詞」から「名詞」の中の「親族名詞」を経て「動物名詞」までの名詞をさす。
- 12) ニ格が生物名詞である例も含む。
- 13) 原文は連体修飾節として出現しているが、分析の便宜のため、主文節に変更した。直接に引用した例文ではない場合、出典に「変更」と記する。
- 14) 出典が表示されていない例文は作例である。今回の調査で C-1 のような例は観察されなかった。C-2, C-5 も同様である。
- 15) 新聞社説に関する別の調査では、頻繁に現れることが観察された。
 - ①しかし、冷戦が終わって以来、世界は民主主義と市場経済をもとにした国際化の時代を迎えている。（朝日新聞 4 月 19 日）
 - ②個人主義に重きを置く戦後社会は個人の尊重を極大化することを目指した。（産経新聞 4 月 2 日）
 - ③文科省は事実関係をきちんと調査すべきである。（産経新聞 4 月 13 日）ジャンルによって、傾向が違うのではないかと考えられる。
- 16) 自然に展開する現象を現すもの。例えば、光、音、雨、臭い、病気。

- 17) 自然に常に存在している具体的なもの。例えば、山、空、石、川、足、頭。
- 18) ここの目的語は、ヲ格だけではなく、「与える」のような動詞に支配されたニ格も含んでいる。
例：学生時代の苦い経験が私に教えている。
ニ格も動作によって働きかけるため、ニ格が生物名詞である場合も考察の対象とする。全部で4例ある。
- 19) ニ格が生物名詞である例も含む。
- 20) 主語と目的語が同一実体で、階層性の差を考慮する必要がないと思われるため、本稿では分析の対象外とした。
- 21) 「目的語が生物名詞」の例は56例で、目的語が「自然の力」の無生物名詞で、主語が「生産物および用具」の例は7例、主語が「自然物および自然現象」の「自然の力」以外の名詞の例は2例である。

参考文献

- 石綿敏雄・高田誠（1990）『対照言語学』桜楓社
- 井上和子（1994）「他動性と使役文」『言語理論と日本語教育の相互活性化』津田日本語教育センター
- 国広哲弥（1967）「日英対照表現構造論—無生物主語表現」『ELEC 言語叢書 構造的意味論』
- 金田一春彦（1981）『日本語の特質』日本放送出版協会
- 国立国語研究所編（2004）『分類語彙表—増補改訂版—』大日本図書刊
- 佐藤里美（1990）「使役構造の文（2）—因果関係を表現するばあい」『ことばの科学』4 言語学研究会編 むぎ書房
- 須賀一好・早津恵美子編（1995）『動詞の自他』ひつじ書房
- 外山滋比古（1973）『日本語の論理』中央公論社
- 田口久美子（1998）「近代における非情物主語の他動詞文について」『国文目白』日本女子大学
- 角田太作（1982）「オーストラリア原住民語」『講座日本語学 10・外国語との対照 I』森岡健二他編 明治書院
- （1991）『世界の言語と日本語』くろしお出版
- 日本語教育学会編（1982）『日本語教育事典』大修館書店
- 吉川武時（1976）「無生物主語をめぐる問題点について」『日本語学校論集』3 東京外国語大学外国語学部附属日本語学校

用例出典

江国香織（1999）『冷静と情熱の間』角川文庫

遠藤周作（1993）『深い河』講談社

島田雅彦（1992）『彼岸先生』福武書店

山田太一（1987）『異人たちとの夏』新潮社

柳美里（1997）『家族シネマ』講談社

吉本ばなな（1988）『キッチン』福武書店

綿矢りさ（2003）『蹴りたい背中』河出書房

（ゆう・おう 博士後期課程）